

演題6. 岩手医科大学歯学部歯科麻酔科における顎変形症手術の麻酔管理の検討

○四戸 豊, 佐藤 雅仁, 栃内 貴子,  
市川 真弓, 佐藤 健一, 久慈 昭慶,  
城 茂治

岩手医科大学歯学部歯科麻酔学講座

目的：近年，各種の顎骨骨切り術の開発，改良が進み外科的矯正による顎矯正外科術が本学でも盛んに行われるようになってきた。そこで，1989年7月から2002年6月までの14年間で顎変形症手術に対して施行された全身麻酔症例について検討したので報告した。

方法：1989年7月から2002年6月までの14年間で顎変形症手術の全身麻酔319症例について，症例数の年次推移，年齢分布，術式（手術部位），導入法，麻酔維持法，低血圧麻酔の使用薬，手術時間と麻酔時間，出血量の年次推移，輸血率と輸血法，抜管率の各項目について臨床統計的考察を行った。

結果：症例数は，年々増加傾向が認められ，年齢分布は，20歳までが162症例と全体の50.9%を占めていた。術式では，下顎後退術が283症例と全体の88.6%を占め，麻酔維持法は，1994年以降はほとんどの症例でGOSが施行されていた。低血圧麻酔時の使用薬は，PGE<sub>1</sub>が1992年より使用され始め，1997年以降は全症例で使用されていた。麻酔時間は，最長12時間5分で4～5時間以内の症例が72症例55.3%と半数を占めていた。出血量の年次推移では，1991年から1995年まで経年的に減少し，1995年以降200g以下の症例が認められた。

考察および結論：今回の臨床統計的考察から，手術時間の短縮・低血圧麻酔等によって出血量の減少が認められた。それによって手術侵襲が軽減し，術後の気道浮腫の危険性が減少したこと，そして，セボフルランの使用により麻酔覚醒の質が向上，さらに，ここ5年で術後の顎間固定法がワイヤー固定法からエラスティックゴムに変化したことによって，緊急時の対処が容易になったことにより術直後の抜管率が上昇したものと推測された。